

「和韻」から見た絶海・義堂

朝倉和

はじめに

「和韻」とは、特定の詩（特に「本韻詩」と言う）と同じ韻を用いて詩を作る方法を言う。わが国の五山文学作品には和韻詩が大量に見られ、稿者は最近、拙稿「五山文学における『和韻』について——絶海・義堂を中心に——」（『国文学攷』第一七九号、平一五・九）において、絶海中津（一三三六―一四〇五）と義堂周信（一三三二―一三八八）の作品類を通して、和韻詩の様相の一端を明らかにしようとした。和韻詩の試みた。「和韻」という作詩法や、絶海・義堂の和韻状況、彼らの和韻詩の詠作状況などを、多数の用例をもとにして、概略的に述べたのであるが、紙数の都合上、彼らの作品に立ち返る余裕がなかった。そこで、本稿では、いま一度、彼らの作品に戻り、「和韻」という視点から新たに見えてきた絶海像や義堂像について、二、三の指摘をしておきたいと思う。

一 『蕉堅藁』九十七、九十八番詩

絶海と義堂の和韻詩を概観すると、その詠作状況は、(Ⅰ)贈答・唱和にもなつて詠作する場合と、(Ⅱ)本韻詩が契機となつて詠作する場合とに大きく分類される。さらに(Ⅱ)は、(a)本韻詩が中国の詩人のもの、(b)本韻詩が先輩僧のもの、(c)本韻詩が自身の旧作、の三つの場合に分けられた。数量的には(Ⅰ)が圧倒的に多く、ここに、五山禅僧の、いわゆる「同社」「友社」（詩会などに集まる文学的グループ）の繋がりと、その中で詩作に興じる彼らの有様とを、稿者は指摘した。『蕉堅藁』九十七、九十八番詩の本文を挙げる。

九七 錢原和清溪和尚韻

世事從來多_三變態。当初早悟有_三如_三空_三。青山高臥茅簷下。不許白雲知_三此_三心_三。

九八 和_三前韻_三答_三崇大岳

拙者八月廿六日乘_レ涼出遊。州中名山曰_三勝尾_一。曰_三箕面_一。曰_三神咒_一。曰_三十輪_一。窮_レ奇探_レ勝興寄浩然。遂詣_三西宮之社_一。所謂劍珠者。蓋絕世之奇觀也。凡_三經_三四日_一而帰_三錢原之寓所_一。乃知_三高駕來臨等_レ余不_レ過而帰_一也。珙童口_三誦見留之作_一。厥韻琅々然也。於是不能_レ無_三社燕秋鴻之歎_一。修_レ書之次輒依_三芳押_一。以答_三來意_一云。

君來我出似_三相避_一。碾_レ媿林慚恨至_三空_一。百歲光陰秋荏苒。何時

風雨細論心

【注】「清溪和尚」は清溪通徹、「崇大岳」は大岳周崇、「瑛童」は元珠瑛珙。

絶海は至徳元年（二三八四）六月、四十九歳の時に、將軍足利義満（二三五八〜一四〇八）に直言してその意に逆らい、摂津国の銭原（大阪府茨木市）に隠棲した（『仏智広照浄印翊聖国師年譜』）。詩題や序文によると、前詩は、銭原で清溪通徹（二三〇〇〜八五）の韻に和したものである。後詩は、絶海が八月二十六日から四日間、勝尾寺、箕面寺、西宮神社等へ赴き、銭原の寓居を留守にしている間に、あいにく同所を訪れ、むなしく帰って行った大岳周崇（一三四五〜一四二三）の韻に和して、その来意に答えたものである。ちなみに、清溪と大岳の詩は、未詳である。

ところで、ここまで述べて来て、一つ気になることがある。それは、両詩の二、四句目の韻字が「今」「心」で、九十八番詩が九十七番詩に和韻（次韻）²している、ということである。ただし、九十八番詩の詩題に「前韻に和して」とあるのは、その序文に「輒ち芳押に依る（あなたの押韻に依る）」とあるように、大岳の韻に和したことを意味している。いったいどういうことなのだろうか。

この現象をスムーズに説明するためには、絶海、清溪、大岳の繋がりを想定せざるを得ないのではないだろうか。三者とも夢窓派である。おそらく大岳は、京都で清溪と接触して、九十七番詩の存在を知り、自身も同じ韻字を用いて、絶海と詩を唱和したのであろう。

したがって絶海は、九十八番詩において大岳の韻に依ったと同時に、結果的に自身の前作（九十七番詩）や清溪の詩にも和韻したことになるのである。建仁寺兩足院藏『東海瑠華集（絶句）』、『五山文学新集』第二卷所収）には、惟肖得巖（二三六〇〜一四三七）の先輩に当たたる五山僧——義堂・絶海・無求周伸・雲溪支山・観中中諦等——の七言絶句が百六首挙げてある。絶海の作は二十二首採られているが、九十七番詩の詩題が「答義堂和尚見寄」となっていることが注目される。想像を逞しくすると、絶海、清溪、大岳の繋がりに、同じく夢窓派の義堂も関与していたのかも知れない。そう言えば、絶海の京都召喚を、義満に進言したのは、義堂であった（『空華日用工夫略集』至徳三年二月三日条）。

二 絶海中津と観中中諦との関係

このように「和韻」に注目すると、今まで気付かなかった同社・友社の実態が浮かび上がって来ることもある。もう一例、絶海と観中中諦（二三四二〜一四〇六）の交流を指摘したい。玉村竹二氏『五山禅僧伝記集成』（講談社、昭五八）によると、観中は阿波の出身で、夢窓疎石（一二七五〜一三五五）や義堂や春屋妙葩（一二一一〜一八八）等に師事し、補陀寺（阿波・諸山）、等持寺（十刹）、相国寺（五山、第七世）の住持を勤めた。『碧巖録』抄を『青嶂集』と言い、別に『三体詩抄』があるが、語録・詩文集を『青嶂集』と称する説もあるという。ここでは、仮に後者の説に従う。『青嶂集』

の引用や作品番号は、梶谷宗忍氏『観中録 青嶂集』（相国寺、昭四八）による。また、返り点も同書を参考にして、私に施した。

まず、『蕉聖叢』には「まさに近県に往かんとして、観中外史に留別す時に臨川復位の断えに因りて、宇治より江州に如く」詩（五三）や、

「観中を懐ふも至らず時に臨川復位の断えに因りて、宇治に客居す」詩（八六）があるが、『青嶂集』には、後詩に和した「和絶海和尚韻」詩（七四）が見られる。絶海は臨川寺事件が原因で、近江に隠遁したのであるが（永和四年（一三七八）、その際、観中と詩を唱和していることは注目されよう。『空華日用工夫略集』永和五年（康暦元年）正月十四日条には、

十四日、（中略）三会回書同来日、中津蔵主今在江州杣云処

一、中諦書記未詳在処一、（下略）
というくだりもある。

また、『絶海和尚語録』（以下、『絶海録』と略す）巻下には「観中和尚の雪韻に和す」詩（二二七）、「観中和尚の仮山水の韻に次して、鹿苑の常光国師に呈す」詩（二六五）、「相国の観中和尚の重陽の韻に次す」詩（二七四）があり、各々の本韻詩は、『青嶂集』に確認することができる（四八 回雪謝諸老先訪）（一一 頃観鹿苑庭下仮山水二題）（一 偈）（呈上堂頭国師大和尚座）（一三 相国重陽上堂）（『青嶂集』には「和絶海和尚重陽韻」于時法鼓新觀）（一二）という詩も見受けられる。この他、『絶海録』と『青嶂集』には、韻字が同じ詩（偈）が散見する。

・『絶海録』巻下・「和相国大岳和尚中秋韻」（二二二）——『青

嶂集』・「和太岳和尚立秋韻」（五六）

・『絶海録』巻下・「次韻賀弘祥荆山長老」（二六三）——『青

嶂集』・「和詩追奉慶弘祥荆山長老」（一九）

・『絶海録』巻下・「和韻謝天寧天倫禪師上竺菴講師過訪」（二

七六）——『青嶂集』・「和天倫和尚韻」（二二）

・『絶海録』巻下・「次韻答樹心翁」（二八〇）、「重用青字韻」

餞心翁東帰」（二八二）——『青嶂集』・「和心翁和尚韻」

（一四）

絶海には日記の類は残されていないが、以上のように、直接的もしくは間接的に、頻繁に観中と詩を贈答、唱和したことに鑑みると、二人がかなり親密な関係であったことが推察される。

三 義堂周信の和韻状況・再考

拙稿において、稿者は、義堂に和韻詩が数多く見られる理由として、彼が当時、禅林社会において中核的な立場に在ったことを指摘した。ここで、いま一度、『空華集』の和韻状況に注目したい。

○巻第一

・古詩（計七首）……二首

・歌（計三首）……一首

・楚辞（計一首）……ナシ

・四言(計一七首) ……ナシ

・五言絶句(計五六首) ……一首

・六言絶句(計一首) ……一首

・七言絶句(計一三三首) ……六一首

○卷第二

☆七言絶句(計二〇九首) ……一一一首

○卷第三

☆七言絶句(計二二三首) ……一〇七首

○卷第四

・七言絶句(計三三六首) ……五六首

○卷第五

・七言絶句(計二四首、四首は他作か) ……六七首

○卷第六

☆五言八句(計一九三首) ……一三八首

☆五言排律(計一首) ……一首

○卷第七

☆七言八句(計一七〇首) ……一四四首

○卷第八

☆七言八句(計一八〇首) ……一四七首

○卷第九

☆七言八句(計一五一首、他作三首を含む) ……八五首(他作二首を含む)

○卷第十

・七言八句(計一〇〇首) ……三六首

・七言排律(計一首) ……ナシ

【注】詩の総数は『五山文学全集』第二巻による。☆印は五割

以上が和韻詩であることを示す。なお、和韻詩の総数は、

現段階で把握し得るものであつて、今後の調査により変動

する可能性がある。本来ならば、本韻詩と逐一、照合する

のが望ましいが、散佚している場合が殆どで、数値は目安

程度に考えていただきたい。

例えば、七言絶句は巻第一(六一首、四六・二%)、巻第二(一

一一首、五三・一%)、巻第三(一〇七首、五〇・二%)、巻第四(五

六首、二三・七%)、巻第五(六七首、三一・三%)、七言律詩は巻

第七(一四四首、八四・七%)、巻第八(二四七首、八一・七%)、

巻第九(八五首、五六・三%)、巻第十(三六首、三六・〇%)に

収められている。()内は、巻中における和韻詩の総数とその割

合を示す。義堂の生涯は大きく、①(京都)修行時代(正中二年(一

三二五)～延文四年(一三五九)、一～三十四歳)、②関東在住時代

(延文四年～康暦二年(一三八〇)、三十四～五十六歳)、③叢寺在

住時代(康暦二年～嘉慶二年(一三八八)、五十六～六十四歳)に

分けられ、『空華集』の作品配列は、詩文の種類ごとに、大体、制

作年代順になっていると思われるので、義堂は晩年になるに連れて、

和韻詩をあまり作らなくなつたと言える。関東における義堂は、春屋の命令で、夢窓派の教練拡大のために、「教義を宣揚することはもちろん、文化政策によつて、有力外護者を檀那に獲得する」ことに努めた。和韻詩の量産も、それらに伴う社交の結果と見ることでできよう。対して、晩年、京都での義堂は、一方で建仁寺（五山、第五十五世）・等持寺（十刹）・南禅寺（五山、第四十四世）等の住持を勤め、また一方で義満や二条良基（一三三〇〜八八）等と親しく交わっていたにもかかわらず、どうして和韻詩を作らなくなつたのであろうか——。稿者は今、この問題に答える用意はないが、義堂の文学観を考える上で、一つの指標になるのではないかと考えている。

ま と め

以上、覚え書き風ではあるが、「和韻」という視点から新たに見えてきた絶海像や義堂像を指摘した。勿論、彼らの作品を精査すれば、まだまだ多くのことを指摘することができるだろうし、また、さらにそれらの指摘を深く追究して行かなければならないのであるが、今回はその一階梯として、絶海・義堂の新たな一面とともに、「和韻」の新たな活用法の一端にも触れ得たと思ふ。今後も「和韻」に注目して行きたい。

〔注〕

(1) 引用は五山版、作品番号は蔭木英雄氏『蕉堅藁全注』（清文堂、平一〇）による。また、返り点は江戸の版本（寛文十年版か刊年不明版）等を参考にして、私に施した。文字囲も私に施した。

(2) 『文体明弁』（明・徐師曾撰）の「和韻詩」項によると、和韻には三種類ある。本韻詩と同じ韻中の文字を用いるが、必ずしも本韻詩の文字を用いなくてもよい「依韻」と、本韻詩の文字およびその順序をそのまま用いなくてはならない「次韻」と、本韻詩の文字を用いるが、必ずしもその順序通りに用いなくてもよい「用韻」である。

(3) 玉村竹二氏は同解題で、兩足院本に関して、つぎのように述べておられる。

この本は、江戸初期の写本であるが、その親本となつた本は、或は惟肖の草稿本であつたかとも思われる。その故は、この本に収められている所の惟肖の作品以外のものは、一見雑然と書きつづけられているように見えて、実はいずれも惟肖に関係のあるものばかりで、江西龍派の作品は惟肖に呈似されたもの、俗詩は惟肖が諸本涉獵の際書留めておいた覚え、義堂・絶海等の詩は、作品がいずれも惟肖に関係の深い人のものばかりであるから、惟肖が先輩の作品を勉強のために抜萃して座右に備えた

ものと考えられないこともない。(一三〇一頁)

(4) 引用は辻善之助氏『空華日用工夫略集』(太洋社、昭一四)による。また、返り点は蔭木氏『訓注 空華日用工夫略集』(思文閣出版、昭五七)を参考にし、私に施した。

(5) 引用は『大正新修大藏經』第八十卷、作品番号は梶谷宗忍氏『絶海語録』二(昭五一、思文閣出版)による。また、返り点は梶谷氏・前掲書等を参考にし、私に施した。

(6) 蔭木氏『義堂周信』(日本漢詩人選集3、研文出版、平一一)、四三頁。

——あさくら・ひとし、修道中・高等学校非常勤講師——